

2019年3月25日

トヨタ財団研究会：日本の中国研究の軌跡と現在

戦前・戦中の「ギルド」研究とその論点

小嶋 華津子

〈1〉戦前・戦中の「ギルド」研究

●橘樸（1881～1945）

*「支那人氣質の階級別的考察」『支那思想研究』日本評論社、1936年。

・支那人（主として生産的プチ・ブルジョア）が形成している部分社会（260～261頁）：

- 一、家族及び宗教結社
- 二、村落自治体
- 三、会館
- 四、幫及び公所（公舎）
- 五、同業組合の聯合団体（ex 上海に於ける中国綿業聯合会）
- 六、総合ギルド（ex 天津に於ける「商業公所」）
- 七、商会及び其の聯合体

・変革期にあつて増強する団体の勢力：

現に君主制が倒れて共和制が興り、商業上の法律や制度が新しい主義の下に変更せられ、中世欧羅巴のギルド組織を崩壊せしめた重要原因の一つとされるどころの大商社や資本家が追々経済界に頭角を現はして来たに拘らず、支那ギルドは現在と雖も猶モールス氏が『支那のギルド』を書き、東亜同文会が『支那経済全書』を編纂した二十年前と同様な勢力を維持しつつある。若し過去と多少の相違があるとすれば、それは寧ろギルド勢力の増進と云ふことである。…各大都市に公会の名を以て種々なる新結社が歳と共に其の数を増して行く形勢にある（272～273頁）。

・社会革命の担い手としての商会

此の数年来商工業者の全国的聯合や商工業プチ・ブルジョアと農業プチ・ブルジョアとの提携即ち全中産階級の結束が行はれる様になると、ギルドは宗族団体や会館と共に、…積極的機能を發揮し始むるであらう」（284頁）

●根岸侷 (1874～1971))

* 『支那ギルドの研究』 斯文書院、1932 年¹。

* 『上海のギルド』 日本評論社、1951 年²。

* 『中国のギルド』 日本評論新社、1953 年³。

・社会調査 (インタビュー、碑文、古文書、章程、規則などの収集) によるギルドの実態把握

・支那人の社会生活の三様式: 宗族、郷党、ギルド

・ギルドの分類 (『中国のギルド』 20 頁):

一、古ギルド (宗教的、社交的、学術的、経済的、政治的、軍事的)

二、新ギルド (1)同郷的 (社交的・経済的)

(2)経済的 (職業的・手工的・商業的)

(3)全市的

* 新しいタイプの公会と商会は経済的・全市的ギルドの転生

●仁井田陞 (1904～1966)

* 『中国の社会とギルド』 岩波書店、1951 年。

・1942 年及び 1943 年の夏、1944 年の秋に、北京にて実施した調査 (約 50 のギルドと、20 余りの同業の会館、同業者の守護神ないし職祖神を祀った 10 余りの寺院、その他北京商務總會 (総商会) と同郷会館数カ所など) に基づく。

・ディシプリン: 法社会学。中国のギルド人の法意識、倫理意識、宗教意識など。

・中国のギルドとヨーロッパのギルドの間の本質的な違い: 自由、自らの法と裁判所 (近代社会における国家への吸収) の有無 (21 頁)。

今日の中国にあって、ギルドは経済機構の上からも、人間意識の上からも、変革を迫られている現実の課題」である (1 頁)

¹ 三好章編集・解説『編集復刻版 根岸侷著作集 第 1 巻』不二出版、2015 年に所収。

² 三好章編集・解説『編集復刻版 根岸侷著作集 第 2 巻』不二出版、2016 年に所収。

³ 三好章編集・解説『編集復刻版 根岸侷著作集 第 1 巻』不二出版、2015 年に所収。

●今堀誠二（1914～1992）

*『中国封建社会の機構——帰綏(呼和浩特)における社会集団の実態調査』日本学術振興会、1955年。

*『中国封建社会の構造—その歴史と革命前夜の現実』日本学術振興会、1978年。

*『中国封建社会の構成』勁草書房、1991年。

・華北（フフホト、綏遠、運城、開封など）での社会調査

・庶民の生活から説き起こす

・豊富な資料：公私文書、「酬世」文件、碑文など

〈2〉現状把握に関する論点

● 家族・宗族・宗教のつながりがギルドにもたらす影響

*根岸侑：血族団体崩壊説（『支那ギルドの研究』）

→中国固有の宗族・家族制から派生したギルドの結社性（『中国のギルド』）

*橘樸：ギルドを規定する政治道徳：

「尊族の慈愛に対する卑族の孝悌」

+相互扶助の思想を支える個人主義思想

現実には家族生活を通じて支那人が獲得する「犠牲及び服従の習慣」、ギルドが社会的・経済的闘争機関であるということへの自覚、共通利益を確保するための必要性による判断から、ギルドの統治形態は専制的なものとなる（『中国のギルド』277～278頁）。

●ギルドの閉鎖性（清水盛光⁴）

*根岸侑：会館や商工ギルドに見られる柔軟な構成・再編の事例→本来小幫分立傾向にあるギルドが大団結する可能性（『中国のギルド』38～43頁）。

*橘樸：団体の連合に着目

伝統的な労働団体は同職及び同郷関係によって結附けられて居り、従って新式の労働組合でも今日では未だ同郷的要素を排除し得ず、大規模な団結を作るに適せぬのであるが、それでも京漢鉄道労働者の産業別組合に於いて見るが如く、同郷関係を超越した団体が緊密な利害関係及び心理関係に據りて形成される機運に向って居ることは明かである」（「支那人気質の階級別的考察」243～244）

⁴ 清水盛光「旧支那に於けるギルドの勢力」『満鉄調査月報』第6巻第9号、1936年。

●ギルドと政府・官僚機構との関係

*Morse⁵：中国のギルドは王朝の特許に依って発生したのではなく、国家の制定法の外部に発達したものである。

*橋樑：ギルドと政府の間には、徴税関係あるのみ。

プチ・ブルジョアの政治は、純粹に彼等の手で創造せられ且つ運営されたもので、中央及び地方政府は徴税以外に彼等の政治と関係なく、寧ろ政府や官僚の圧迫及び搾取に対抗することが彼等の政治の主要目的の一つであった」（「支那人気質の階級的考察」259頁）。

*仁井田陞：ギルドマーチャントあるいは同業ギルドの連合体は、道路建築、貧民救済、度量衡や貨幣の統一、消防隊や警察隊の組織などにおいて都市行政に関与したが、その際、目的遂行のために役人の権威を借りることもあった（『中国の社会とギルド』22頁）。

*根岸侑：中国にも「特許状」という厳格な形態こそとらないものの、唐や宋の時代に遡れば、歴史的にギルドに特許を与えた時代もあった（『中国のギルド』28～29頁）。

中国のギルドが…、権利を享け、義務を負ふべき主体と認められていたことは明かである。会館、公所を設立するとき、関係官庁、例之、知県衙門に届出でて、その許可を請ひ、その工事に着手するときも亦届出でて土地家屋の所有権の確認を求め、更にその章程を作製したときその認可を受くるのである。…ギルドと官憲の交渉多く、且つ微妙であるから、清代相当なるギルドに於ては学人などの学位を有するものを招聘して、その局に当らしめ、之を出官と称していた。上記の如くギルドは村落と齊しく自治的団体であるけれども、政府より相当の制約を受けるものであって、又その保護を要求しないものでないのだ」（『中国のギルド』25頁）

〈3〉視角に関する論点1：中国の「ギルド」と近代国家

●岸本美緒：ギルドは「近代国家」形成の阻害要因となるのか、あるいはギルドの延長上に国家があるのか⁶。

⁵ Hosea Ballou Morse, *The guilds of China : with an account of the gild merchant or Co-hong of Canton*, London ; Longmans, Green, 1909.

⁶ 岸本美緒『『市民社会』論と中国』『地域社会論再考 明清史論集2』研文出版、2012年。

「内藤や孫文の議論においては、家族・宗族などのもつ自然で強力な内面的結集力、郷団における人民の自治的訓練の直接延長上に国家大の結集が展望されている」（『市民社会』論と中国」111頁）。

* 橘樸の議論

郷団やギルドの連合が国家的結合の基礎になり得るとする点において、内藤も橘もまた孫文も共通である（『市民社会』論と中国」113頁）。

・相互扶助と対等な権利を基礎とする道徳、団体内部のデモクラシーやデモクラチックな価値、法治主義に国家的結合の基礎となる鍵を見出す。

ギルド政治は各成員の利害及び感情に平等の価値を認め、それを規蓋し糾合し発表するにある（『支那人気質の階級別的考察』276頁）。

支那の凡ゆる社会に於いて成文法及び習慣法の最も発達して居るのは商工業ギルドであると思ふ。ギルド及びその聯合体又は総合体が民族国家建設の中心勢力となるものとすれば彼等の内部に発達した法治主義は、新国家の重要な理論的及び實際的基礎となり得るものであると思ふ（『支那人気質の階級別的考察』285頁）。

* 戦後の階級闘争論の波及→郷団やギルドの連合が持つ「封建性」や搾取性への着目、「共同体論」批判：仁井田陸、今堀誠二

・仁井田の期待：ギルドなどの旧中間団体のもっていた「偽」の共同性を、「真」の共同性へと覚醒するプロセスを通じた国家建設（『市民社会』論と中国」120頁）。

* 根岸侑の立場

・中国ギルド及びその成員の構成は位階体統を成す。

商店ないしギルドの成員：家長＞尊長＞幼卑

商工ギルド：錢莊業＞問屋業＞小売業

ギルド連合、産業別ギルドの結成

清末以降は商会＞公会の法制化

他方で、階級闘争は回避され、階級協調が行われることが多かった。

位階的關係は、「公事に奉仕し、信望を博する」「家長的領袖」による領導により協調される（『中国のギルド』44～46頁）

「西欧に階級闘争説出てから、我邦の中国を研究するもの之を中国に適用し、凡ゆる関係を対立観を以て律せんとするものあるに至った」が、「中国人は調和の才能あって、闘争よりも、協調の有利なるを知り、階級協調に務めるから、ギルドに於て闘争蜂起すること甚だ少ない」（『中国のギルド』48頁）。しかし、家庭内でもいざこざはあるのであり、階級闘争がないと言うのは絶対できない（同51頁）。

〈4〉 視角に関する論点2：中華人民共和国成立以降との連続性

●ギルドを支えるネットワークの頑強性

橘樸：「欧羅巴社会史の教へるところに依れば、国家としての団結力又は政治的及び経済的中央集権制が発達するに従って各種部分社会の団結力或ひは統制力が衰微した。支那でも矢張り之れと同じ順序が繰返されるであらう。如何に家族や宗族制の統制力の強すぎることを呪っても、先づ民族乃至国家の統制力を強めた後でなければ、家族・宗族と云ふが如き血縁的部分社会機能を弱めることは出来ないであらう」（「支那人気質の階級別的考察」290～291頁）

*根岸侑：国民政府は人民団体組織方案や商会法、工商同業公会法を定めてギルドを制度化し、その自律性を制限したが、他方で業界規則の公訂や公益慈善事業の実施などを認めたため、伝統的なギルドの特色は維持され、公所、会館には旧式ギルドの習慣が残された。中国共産党が政権を掌握して以降も、物価の安定、租税、公債、献金の獲得において公会の利用価値を認めた。ただし中共の合理性を前にギルドは存続の危機にある。従ってギルドもまたついに廃止されるか、あるいはギルド精神を保有する新組合に更生すべきか、これを将来の事実に徴する外なからう（『中国のギルド』478頁）。

●階級闘争史観とギルドの消滅

*仁井田陞、今堀誠二：ギルドは封建的機構・共同体であり、民主主義と近代国民国家の実現により消滅・解体の運命にある。

*中華人民共和国におけるギルドの「社会主義改造」、解体（小浜正子、川原勝彦⁷⁾）

⁷⁾ 小浜正子『近代上海の公共性と国家』研文出版、2000年。川原勝彦「中共政権の成立と中国同郷団体の改造・解体——上海の公所・会館の事例を中心に」『アジア経済』第46巻第3号、2005年3月。

〈5〉 視角に関する論点3：西欧発の概念・理論と中国の現状との接合

●岡本隆司による橋、根岸、仁井田、今堀（ほか）批判⁸：西洋中心主義史観の無前提・無媒介な踏襲 ex 「ギルド」「中世」

橋のいうところの「科学的方法」とは、西洋社会およびその歴史という「普遍的」な軌道にのっとして、中国社会の来し方・行く末を考えようとするものだったのである。そのために同じ「郷団自治」「支那の政治」を扱っても、中国を最も「自然」、西洋を「変則」とみなす内藤湖南とは、およそ百八十度「正反対」の異なる評価となった（『近代日本の中国観』121頁）。

けっきょく橋が「支那通」を「非科学的」とバカにしたのは、西洋の学問に通じない、あるいはその概念を使って立論しないからであった。欧米由来のカタカナ語を駆使し、西洋理論を引用すれば「科学的」という。しかしそれなら、同じ外来の漢字がわかり、漢文を読めれば「智識の豊富」を称する「越中禪」の凡庸な「支那通」と、思考方法・精神構造でほとんどかわるところはない（同上、122頁）。

Cf)加藤繁（1880～1946）『支那経済史考証』

「京都学派」：「樸学」

・ア・プリオリに西洋概念を用いて中国を論ずる傾向は、日本における「西洋式アカデミズムの確立と普及」がもたらしたものであり、それが「日本人の中国観に定着し、あたかも抜きがたい習癖ようになっていった」（同上、147頁）。

・そもそも学問全体が近代西洋で成立した以上、研究対象の東西問わず、西洋がモデルになるのは不可避的な宿命である。しかし少なくとも西洋の理論概念を「無前提、無媒介、無批判に短絡させる」ことは避けなければならない（同上、186頁、208～209頁）。問題は、「どこまで、そんな西洋モデルをそのまま適用すれば良いのか、対象の性質に応じて、いかに反省し、どれほど修正してゆくのか」にある、と（同上、186頁）。

谷川道雄の問題提起を引用——「わたくしたちの中国史把握は」「従来のヨーロッパ主義的近代主義的歴史認識を単に排除してしまうのでなく、ある意味ではこれを包摂し、そしてこれを超えてゆくような視座に立たねばならない」のではないか（「中国社会の構造的特質と知識人の問題」『中国中世社会と共同体』）（同上、200頁）。

⁸ 岡本隆司『近代日本の中国観——石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで』講談社、2018年。

●岸本美緒：中国史における「市民社会」に関わるテーマの再提起

*「中国社会論は、同時に近代論でもある、という宿命を長く背負ってきたと言ってよ
いだろう」（『市民社会』論と中国」100頁）。

→「近代」概念の中核をなす概念としての「市民社会」に着目

*日本の中国史研究においては、西欧近代モデルに対する抵抗感や当の中国自身が市民
的民主主義ではなく人民民主主義を選択したという認識により、「市民社会」という概
念はほとんど用いられてこなかった（同上、101～102頁）。

*しかし、中国史研究がこれまで展開してきた村落やギルドをめぐる議論は、「個の解
放・自由」に重きをおくか／「団体的秩序を支える倫理的自律性」に重きをおくかをめ
ぐる西洋市民社会論の系譜と重なりあう問題意識をもっているのではないか（同上、122
頁）。

*ハーバーマスの『公共性の構造転換』の英訳本出版（1989）を機に「市民的公共圏」
への関心が高まる中で、欧米の市民社会論が「公共圏」に対して期待する政治的批判の
機能を持たずして相互扶助的機能を担い、近代国家建設の基礎として捉えられたギルド
ほか中間団体をどのように位置付けるか。